

平成三十年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かっこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【大学生の「わたし」（桐子）は帰省した際、家族でさくらんぼ狩りのバスツアーに参加することになっていた。ところが、姪の急病のため兄と母が参加できなくなり、父と二人で参加することになってしまった。】

母は「たまにはお父さんと二人もいいじゃない」と言っていたけれど、確かに父と二人で出かけたことなど、記憶にない。

小さいころはそんなこともあったかもしれない。ただ、もともと父は子どもの扱いがうまいほうではないし、口数も少なく冗談などは口にしな人だった。年頃になったわたしが父を「お父さん」でなく「遠藤忠雄」という人間として観察してみようとしても、①ジシヤクの同極同士のように、「お父さん」以外の視点を持ったわたしから、「遠藤忠雄」は一定の間隔でふふよと逃げてしまうようだった。

一度、家の玄関先で父と当時高校生だった兄が殴りあいの喧嘩になったことがある。細い体に顔を蒼白にした父が日に焼けて体格のよい兄とつくみあっている姿は、幼稚園児が本物の相撲取りを相手に奮闘しているみたいだった。ちやうど風呂からあがったばかりだったわたしは、仲裁に入る母を助けようともせず、自分の肌から立ち昇る湯気と一緒に②父への興味が消えてなくなっていくのを感じていた。同情とも軽蔑ともつかない気持ちだけが残った。喧嘩の原因を兄に聞いても、教えてくれなかった。どうせ父のほうに正当な理由があるのだろうけれども、わざわざ本人に聞くほどの興味もはや覚えていなかった。

結局、彼はただの「お父さん」だという結論に落ち着くのが、いちばん楽だったのだろう。当時ほかにも考えるべきことが山ほどあったわたしは、③つかまえられそうでつかまえられる「遠藤忠雄」をそのままにして、忘れてしまった。

会話の糸口にしようとしているのかなんなのか、わたしは父と二人で出かけた記憶をどうにか思い出そうとしている。窓の外には④コウソウビルが消え、バスは手入れの行き届いていない街路樹と、色あせた壁に小さな窓がはめ込まれた建物が続く通りを走っていた。ガイドが配った紙コップの麦茶をわたしはいつの間にか全部飲んでいて、バスが角を曲がった拍子に、空のコップが小さいテーブルの上で転がった。

このバスにはガイドの他に「添乗員」なる若い女も乗っている。さっきまで彼女が今日の天気や一日の予定を心地よい低音の声で話していたけれど、今ではそれに代わって後ろに座る女子大生たちの高い声が耳につく。わたしもキャンパス内のベンチで同級の女の子たちとたわいない話

をしたりするが、そういうときの自分も、はたから見れば後ろの女たちと同じくらい浮わついた若者に見えるのだろうか。

早起きをしたわりに目を閉じても眠くならない。ガムをもう一枚口に入れ、トートバッグの中からカメラの入ったケースを取り出してみる。友人に誘われて先月入った写真教室で、先生に勧められたこの機種を六回の分割払いで買った。高い買い物だったけれども、とりあえず買ってしまった。ええそれが新しい趣味になるだろうと思った。今回の日帰りツアーも、あまり気は進まなかったものの、風景写真の課題にちよいどいいと思って母の事後承諾を受け入れたのだ。

⑤ストラップを首にかけファインダーに目を近づけたりしていると、父は興味があるのだからかわからないような目で、わたしの手元を見ている。

「それ、※一眼レフってやつか」

「そう。一眼レフ」

「写真撮るのか」

「写真教室、通ってるから」

「いつ？」

「毎週木曜」

「大学の授業か」

「違う。写真教室。個人の」

「いつから」

「先月」

「そうか」

バスが信号待ちのために停車した。窓の外には、すすけて貧弱な屋根に不釣り合いなほど大きな看板をつけた古い民家が見えた。青地に白抜き文字で『青木金物店』と書いてあった。わたしはもう父との会話を終えた気になって、『金物』とは具体的にどういうものを指すのだろうとぼんやり考え始めている。一番最初に思い浮かんだのは、餅を焼くための金網だった。実家に帰ったのは今年の正月以来だった。

「で、何を撮るんだ」

質問はするものの、父の視線はすでに目の前のテーブルに載った麦茶に注がれていたし、その声は母に「台ふきん、とってくれ」と言うときの声と同じように、たいした意思もなく聞こえた。わたしは数秒の沈黙の中、二人が『父と娘の対話』というコントか何かをやっているような気持ちになった。と同時に、後ろの女子大生たちの盛り上がりのせいとか、どうにかここで言葉を続けなくては、という妙な圧力も感じた。

「テーマが、かけら」

「かけら？」

「かけら、っていうテーマで撮って来いって」

「何だ、かけらって」

「だから、例えばあそこに見えてる金物店の看板とか、あの木の下に転がってる空き缶みたいなやつとか、そういうのじゃない。よくわかんないけど」

「かけらか」

「たぶん、世の中はかけらであふれてるって言わせたいんじゃないの」

「そうか。難しそうだな」

バスが動き出して、青木金物店の看板も見えなくなる。カメラは手のひらでこつこつと角ばって、扱いづらかった。こんなに重くて角ばったものが手になじむときが来るのか、いぶかしく思った。写真教室にいるカメラを首から下げた人たちは、なんだかやたらにかっこよく見えるが、自分はそのうちのとはちよつと違うような気がする。わたしはカメラをケースにしまい、それをまた、トートバッグの中にしまった。

前のほうでガイドが立ち上がって、もうすぐ高速に乗ること、次のサービスエリアまで一時間ほどあること、などをアナウンスした。

サービスエリアに止まったバスから別々にトイレに行った後は、父と売店で待ち合わせることにになっていた。サービスエリア独特のミニチュアの監獄のようなトイレから出て外の空気を吸っていると、冷房で冷えた肌に日差しが気持ちよく、そこで売店から出てくるはずの父を待つことにした。

花壇のふちに腰かけ、ぼんやり周りを眺めているうち、同じように少し離れた花壇に腰かけている父の姿を見つけた。わたしには気づいていないみたいだった。売店で待ち合わせるようになっていたのに、父のほうでも中に入っていく気配がない。バスが発券するまでまだ十分ほどあった

し、立ち上がるのも面倒だったので、そのままそつちに目をやってた。

すると、父の前を通りかかった白髪のおばあさんが売店に上がる低い階段でつまずき、遠目からでもかなり③キケンな転び方をした。父はさつと立ち上がり、おばあさんを助け起こし、足元のおぼつかない彼女を周りの人とかつぐようにして売店の奥に連れて行った。わたしは花壇に腰かけたまま、父があれほど機敏に動くことに軽いショックを受けていた。③見てはいけないものを見てしまったような気がして、足元に視線を落としコンクリートの上に散らばっている土の粒をじつと見つめた。あんなふうに父が人を助けるところを初めて見た。父がわたしや兄や母を助けたという記憶を、今見た光景と同じくらい鮮やかに思い出すには、もう少し時間と手がかりが必要だった。

売店に隣接する不細工な塔のてっぺんにある時計は、あと数分でバスへ戻る時間を示している。おばあさんの怪我がひどくなければいいけれど、と思ったけれど、バスに向かって歩き始めたときには、ああ、カメラを持っていれば人助けをする父を撮れたかもしれないと、そんな節操ないことを考えていた。

出発の時間になっても父は戻らなかった。五分ほど遅れて、通路の両脇の人々に向かってぺこぺこ頭を下げながら、座席に戻って来た。

「先に戻っちゃった」

わたしと言った

「ああ、いいよ」

と答えて、また静かになった。

さくらんぼ園にはそれから一時間もしないうちに到着する予定だった。

途中ガイドが、通りかかった町の炭鉱にまつわるあやしげな昔話をする。その昔、この町に炭鉱や工場が作られ始めたころ、運営の指導団としてしばらく欧米人が滞在したのだという。欧米人が飲む赤ワインを見て、町の住人たちは「あれは働きに来ている若い女工の血だ」と勘違いして、大騒ぎした、という話だった。

「血が、あんなにさらさらなわけじゃないじゃんね」

話の途中でわたしがちやかすと、父は「そうだな」と返事した。バスの中にはまだ笑い声が残っている。退屈なので、しまったカメラを取り出してバスの中から窓の外の風景を何枚か撮った。

父は助けたおばさんの話をしなかった。わたしもその必要はないだろうと思い、何も言わなかった。

高速を降りて、しばらく市内の道を走った。遠くに輪郭だけ見えていた山が、今ではその盛り上がったところ、へこんだところ、木が茂っているところまで肉眼で見えるくらい近くにある。ようやく窓の外に赤い実をつけたさくらんぼの木が見え始めると、喋りつかれてうとうとしていた女たちがうわあと口々に叫び、車内が急に騒がしくなり、それにうんざりしたかのようにバスが力なく停車した。カメラを首からぶらさげて外に出ると、澄んだ空気に女たちはますます大きな歓声をあげる。まだ十時前だった。

小高いところにあるさくらんぼ園の隣には、満開とまではいかないものの、白い小さな花が咲いたそば畑が下りの斜面に広がっている。その白い地面が終わるところに深緑のりんごの木連なりがあり、その向こうには細い道路、そしてまた白い花の地面が広がっている。風景が視界におさまらない。ぜんぶを見ようとすると、すぐに焦点が合わなくなる。

更に向こうには、青い巨大な石のようなアルプスの山々があった。北とか中央とかいろいろあるらしいけれど、わからない。たぶん父に聞いても知らないと思う。どこかに一つ大きなアルプスという山があつて、あそこに見えているのはそのかけらと言えないこともないだろうと、その場で何枚かシャッターを押した。

園内と農道を仕切る網をくぐってさくらんぼ園に入ると、ツアーの一行はめいめいに気に入った木になっている実をつまんで、次から次へと口に放りこんでいる。一番手前にあつた木は大きく、手が届くところにすでに実はなかつたけれど、背伸びをして何個か実をつまんだ。赤と橙と黄色が混じつたような色の実は、手のひらに乗せて太陽の下で見ると、人が食べるものではないように見える。喉が渇いていたし、慣れない人の隣に座ってどこか緊張していたのか、五限目の授業が終わったときのように頭がぼんやりしていた。わたしは何も考えず、しばらくさくらんぼを食べ続けた。

少し落ち着いたところでさくらんぼ園の中に父を探してみると、農園の人と間違われたのか、アメリカンチェリーの木の周りに集まってきた中年の女たちに取り囲まれている。手の届かない高いところにあるのや、入り組んだ枝の根元になった赤い実を彼女らに一つ一つとってやっているらしい。

父はこれといって主張も害もなさそうな顔つきをしていて、性格にがめついところもない。浮世離れしているようなところもあるが、派手に遊びはしないし、背が高いという点以外はあまり男という感じがしない。

父があと三十歳若く、自分と同じ歳くらいだったら、と想像してみる。わたしは魅力を感じうるだろうか。さくらんぼを一つ食べ終わらないう

ちに、それはないだろう、と思った。わたしの好みはむしろ、父とは正反対の、よく喋り、どこまでも陽気な男だ。実際、今付き合っている男の子もこちらが気後れするくらいの能天気な性格をしている。家族全員でさくらんぼ狩りに行くことを告げたときも、「へえ、桐子んちって仲いいんだなあ、俺も誘ってみようかなあ」などと、うらやましそうに言っていた。

そうはつきりしてしまうと、今度はなんだか父が気の毒に思えてきて、⁽⁴⁾手のひらにさくらんぼを乗せられるだけ乗せて、後ろ姿へ近づいていた。

「そこ、その葉っぱの奥のもう一個、お願い」

「どこですか」

「もうちょっと右。腕のばしてー、あ、そこそこ」

群がるおばさんの一人の手のひらにつやつやとした赤い実を落としてやると、次の一人からまた注文がやって来て、自分が食べる間もないようだった。それでも父は嫌な顔などせず、おばさんたちの言いなりになっていた。娘としてはあまり見えていて気持ちのよい光景ではないが、先ほどのおばあさんの一件といい、父が一人前の男として人の役に立っているのを見るのは、⁽⁵⁾突然人間の言葉を話し出した犬猫を見ているようで、好奇心が勝って目が離せない。

父は後ろで見ているわたしに気がつく、「食べる？」とほとんど実がとりつくされたアメリカンチェリーの細い木を指差した。

「もうないじゃん、それ」

また一人、めざといおばさんが高い葉の裏に実を発見したらしく、父のポロシャツをひっぱった。後ろにいるわたしが手のひらのさくらんぼを全部食べ終わる前に、父はおばさんたちに誘われるがまま、別の木のほうに移動していった。

(青山七恵『かけら』より)

※ファインダー……撮影する際にのぞく、カメラについた小さい窓。

※一眼レフ……カメラの種類。本格的な写真が撮れる性能の高いカメラ。

問一 線①③のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線(1)「つかまえられそうでつかまえられない『遠藤忠雄』をそのままにして、忘れてしまった」とありますが、ここでの「わたし」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

父を一人の人間として見ようとした時期もあつたが、父が無口なせいもあつてその内面を詳しく知る機会もないまま関心が薄れ、今は単なる「父親」としてしか認識しなくなっている。

イ父のほんやりとした人間像をはつきりととらえたいと願うものの、子どもには自分の内面を見せようとするこのない父の様子からは、それをつかむことは不可能だと諦めて^{あきら}いる。

父と家族がどのように関わるべきかを考えようとするうちに、家族との関係をうまく築けない不器用な父の姿に次第に同情と嫌悪を覚えるようになり、父への興味が持てなくなっている。

工
父親とはどのような人物であるべきかと考えるようになったが、父との記憶は幼いころのわずかなものしかなく、それもほかの考えるべきことに埋もれてしまつてどうでもよくなつてゐる。

オ
父がどんな人間なのかということを知りたいと思つたが、似た者同士である父とは互たがいに歩み寄ることができずに時間だけがむなく過ぎ去り、忙いそがしさの中でその思いが薄れている。

問三——線(2)「ストラップを首にかけファインダーに目を近づけたりしている」とありますが、この表現の前後での「わたし」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

父との会話のきっかけを探りながら車内の様子をうかがっていたが、旅の目的であるカメラのことを思い出し手に取った。父がカメラについて質問してきたが、うわの空で気のない会話をしながら、撮影のテーマについて思いをめぐらせている。

イ父と会話をしなければならぬと思うあまり気もそぞろになり、つい愛用のカメラを手にしてしまった。それを目にした父から話しかけてきてくれたので、テンポの良い会話をつづけることができ、車窓の風景に目をやる余裕よゆうが生まれている。

父と出かけた記憶を思い出そうとしていたが、次第に他のことに気をとられ、カメラを触りはじめた。思いがけずそれがきっかけとなつて父との会話が始まったが、通り一遍の短い会話に終始してしまい、再び別のことを考えだしている。

父とのふれあいの記憶を何とかなどろうとしたが、うまく集中できず、課題の写真を撮ろうとカメラを取り出した。父がしげしげとカメラを見つめてきたことから、写真についての会話が弾み、撮影にむけての意欲が高まってきている。

父との思い出を振り返ろうとしていたが、気持ちがそれてしまい、買ったばかりのカメラを取り出してみた。それを見た父が話しかけてくるが、気の無い返事をして会話を適当に切り上げ、車窓の風景から写真のイメージを広げようとしている。

問四 ――線③「見てはいけないものを見てしまったような気がして、足元に視線を落としコンクリートの上に散らばっている土の粒をじつと見つめた」とありますが、父がおばあさんを助ける様子を見た「わたし」の心情の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人のためにふり構わず行動できる父の姿を目撃し、父が今までずっと見せてこなかったその本性を初めて垣間見ることとなり
 普段の家庭での物静かな父の様子とのへだたりの大きさに衝撃を受けている。

イ父のこれまで見たことのない優しさで行動力のある姿を目の当たりにし、今まであまり関心を払ってこなかった父の意外な一面を思いがけず知ることとなり、予期せぬ事態に戸惑^{とまど}っている。

ウ　機敏に物事に対応することのできる父の姿を目にして、父の本当の姿と向き合うことをこれまで避け続けてきた自分に気づいてしまい、予想外の展開に動揺を隠すことができなくなっている。

工 普段とは別人であるかのような迅速で適切な父の行動を見せつけられ、今まで自分が見てきた父の姿は何だつたのだろうかという疑念にとらわれ、自分の洞察力のなさに驚きあきれている。

オ父が何の躊躇もなくつつさに行動する姿を見て、普段の家庭でのおっとりした姿とはあまりにもかけ離れているため、見慣れない父の姿に気恥きはずかしさを覚えている。

問五 — 線④「手のひらにさくらんぼを乗せられるだけ乗せて、後ろ姿へ近づいていった」とありますが、「わたし」がこのような行動をとったのはなぜですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問六 — 線⑤「突然人間の言葉を話し出した犬猫を見ているようで、好奇心が勝って目が離せない」とありますが、ここでの「わたし」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物静かで存在感のない父を「わたし」はまるで相手にしていなかったが、とっさにおばあさんを助け、嫌な顔ひとつせず女性たちの要望に応える父の機敏な姿を目の当たりにして、父は本当は注目に値する優れた人物なのではないだろうかと考え始め、その後ろ姿に引き付けられている。

イ 「わたし」はずっと一緒に過ごしてきた家族としてしか父を見ていなかったが、とっさにおばあさんを助け、嫌な顔ひとつせず女性たちの要望に応える父の優しい姿を目の当たりにして、家庭の外での父の姿を初めて知り、自分の父が頼りがいのある人物であると思うようになっていく。

ウ 家庭でのぶっきらぼうで口数の少ない父を「わたし」は疎んじていたが、とっさにおばあさんを助け、嫌な顔ひとつせず女性たちの要望に応える父の紳士的な姿を目の当たりにして、外面を良く見せようとする父の後ろ姿に、見てはいけないものを見るような好奇のまなざしを向けている。

エ 家では台ふきんさえ母に取ってもらうような何もできない父を「わたし」はずっと軽蔑していたが、とっさにおばあさんを助け、嫌な顔ひとつせず女性たちの要望に応える父の献身的な姿を目の当たりにして、家の外に出れば色々なことができるようになるものだと、その変わりように深く感心している。

オ つかみどころがなく頼りがいのない父に対して「わたし」は特段の関心を持つてはいなかったが、とっさにおばあさんを助け、嫌な顔ひとつせず女性たちの要望に応える父の意外な姿を目の当たりにして、不思議なものを見たような気分になり、注目せずにはいられなくなっている。

問七 次のア～キは、この作品を読んだ生徒たちの発言です。作品の解釈として明らかな間違いを含むものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 前半は「手入れの行き届いていない街路樹と、色あせた壁に小さな窓がはめ込まれた建物」や「ミニチュアの監獄のようなトイレ」などといった暗い印象を受ける描写が多いけれど、後半はさくらんぼ園周辺の自然の風景が美しく描かれているね。作者が自然の美しさをテーマの中心に据えようとしていることが分かるね。

イ 「カメラは手のひらでこつこつと角ばって、扱いづらかった。こんなに重くて角ばったものが手になじむときが来るのか、いぶかしく思った」という表現が気になったよ。「わたし」の手にカメラがなじまない様子は、その場面での「わたし」と「父」とのぎこちない関係を表しているようにも思えるね。

ウ この作品は『かけら』という題名だけれど、本文中にも「かけら」をイメージさせる言葉がいくつかあるね。例えば「コンクリートの上に散らばっている土の粒」とか。それに「風景が視界におさまらない。ぜんぶを見ようとすると、すぐに焦点が合わなくなる」という表現は「かけら」と「全体」との対比を表しているのだと思う。

エ この物語は「わたし」が「父」の「かけら」を拾い集めていく物語なのかもしれない。単なる「父親」としてしか見ていなくて、全体像の見えなかった人物の、これまで見たことのない一面、つまり「かけら」を目にして見方が変わっていくというのがテーマなのだと思う。小さなことでも、今日の前にあるものをきちんと見つめるとちがった発見があるね。

オ 「窓の外には、すすけて貧弱な屋根に不釣り合いなほど大きな看板をつけた古い民家が見えた。青地に白抜き文字で『青木金物店』と書いてあった」という表現があるけれど、これは「お父さん」というレッテルを貼られた、やせたおじさんとイメージが重なるね。「わたし」は「金物店」がどういう店か具体的にイメージできないように、「父」のこともよくわかっていないのかもしれないね。

カ この作品は「わたし」の視点から描かれているね。「父はこれといって主張も害もなさそうな顔つきをしていて、性格にがめついところもない」というように、「わたし」から見た父の姿が率直に描かれているけれど、「お父さん」が「わたし」をどう見ているか、何を感じているかは分からないから逆に気になるよね。

キ 「わたし」と父との関係性や気持ちの変化が、二人の会話を中心にしてリアルに描かれているよね。父親と思春期の娘との関係は難しいと言われるけれど、父親に対する「わたし」の起伏に富んだ複雑な心の動きが生き生きと躍動感のある文体で表現されていて共感できたわ。

僕の若かりし頃の話にまた戻りますが、要するにかつての音楽ファンは（別に音楽に限らないのですけれど、とりあえずこの例で進めます）インターネットがなかったたので、自分の手足と目と耳で好きなミュージシャンの情報を集めるしかなかった。そしてそれが当たり前だったから、特に不満も感じていなかった。でもあの頃、今みたいにネットでサクサク検索できていたら、どんなに楽だっただろうと思います。はつきり言っている僕、あの苦労を全然肯定はしません（基本的に何につけ僕は、苦労はしないで①スむなら全然しなくていい、という考え方です）。単に仕方がなかったから皆、頑張っていただけのこと、ネット時代になって以後の方が、ずっとラクだし良いに決まっています。だって、なんでも一発検索で山ほど情報が出てくるのだから。

ところが、どうにも不思議なのは、そんな途轍もなく便利な魔法の情報拾集器であるインターネット検索によって、先に述べた「困難」が惹き起こされているように思えることなのです。

どういふことか、ちよつと※トレースしてみます。たとえば、あるミュージシャンについて知りたいと思つて、その名前で検索してみたとしても、有名な人なら数千万件ものウェブページがヒットしますし、かなりマイナーな人でも、意外な程に数多くのページが見つかります。繰返しますが、それはとても便利です。でもしかし、ここから奇妙な展開が起こる。

検索エンジンは、インターネット上に置かれた膨大な情報群から、特定のキーワードにかかわるものを自動的に拾つてきて表示します。検索キーワードを複数入れれば、そこから更に絞り込むこともできるし、閲覧数や頻度が上位のものから表示してくれる。だから普通、何か調べものをする場合には、せいぜいが上から数件とか、多くても十数件くらいの参照ページをチェックすれば事足ります。

けれども検索結果には、それ以後も延々とページが続いている。ある数を超えた検索結果をすべてチェックすることは、事実上、不可能だと言えるし、何より時間の無駄です。しかしそれでもネット上に、その事象にかかわる情報が、少なくともそれだけの量は有るという事実だけは間違いない。そうすると、ふと段々と心配になってくるのです。もしか、自分にとって重要な、自分にとって真に有用な情報は、まだ見れていない、もつと後のページにあるのじゃないだろうか。そう思つて次々と検索結果のリンクをチェックしていきます。でもそれはいつまで経つても終わらない。どこかで止めるしかない。でも、もしも見るのを止めた次のページに、自分にとって決定的に重要な情報が載っていたら……そんなことは

ありえないとわかつていても、こんな奇妙な心配（？）を思わず抱いてしまつて、ついついつまでも検索結果を見続けてしまうことが、僕にも時々あります。

もちろん、このような心配は、検索機能を上手に駆使することで、かなりの程度、回避することができずし、誰もがいつでもこんな心配に陥るわけではない。しかし、ここで言いたいことは、ネット検索は、ある情報の※エッセンスをコンパクトに得るためのツールであるとともに、その情報の総体の膨大さと遍在ぶりをも同時に表示してしまうということです。検索エンジンというものは、何事かについて何らかの形で僅かでも言及しているインターネット上の「すべて」の情報の在処を、②「イッキ」に可視化します。上位数件を手早くチェックして「これでわかった！」と思つたとしても、その後もまだまだ延々と続いていることは一目瞭然です。だから、それは「これでわかった！」と「でもこれだけではない？」を、つまり「これだけいい」と「これだけじゃまだ足りない（かもしれない）」という矛盾した認識を、検索主体に「一緒に与えることになる」。

でも、そんなのはネット検索以前だって同じことだったのじゃない？ そう問いたくなるかもしれません。実際そうです。昔だって、いつだって、何かについての「これでわかった」「これだけいい」という意識は「本当にそうだろうか？」という不足感への疑いを隠しているものだと思います。しかし前にも述べたように、昔はそれでも、まず「これ」からはじめて、ちよつとずつ掘つていつて、どこかで止める（止めざるを得なくなる）しかなかった。止まる瞬間は、現実的な要請や無理矢理の納得といったような至極適当で曖昧な理由で齎されるのだけれど、とにかくそういうものだった。なぜなら「ここまで来たらすべてです」という指標が見つけ難かつたからです。しかしある意味で、ネット検索は、その「指標」を明示してしまう。それはあたかも、それらが「すべて」であるかのような「検索結果」を、顕在化し可視化してしまう。そうではないことを誰もが重々わかつていても、次第にネット上の「すべて」は、現実世界の「すべて」と似たような、ほとんど同じことのごとく受け取られるようになっていく。

インターネットとは、われわれが生きているこの「世界」の、言つてみれば「データの表象」です。そしてこの意味で、それもまた一種の「世界」と呼んでみることができます。ややこしくならないように後者を「セカイ」と表記することにしましょう。「セカイ」は「世界」に属しているという意味で、その一部ではあつても、イメージ的にはむしろ「世界」に丸ごと折り重なるようにして存在しているものであり、けれどももしか、たとえば「世界」の「鏡」のようなものだと言つてみても、あるいは「世界」への注釈（群）と呼んでみても、いまいふ何かが足りないようにも思える、独自の存在状態を持っています。

検索エンジンは、そんな「セカイ」に見取り図を与えてくれます。だが問題は、「セカイ」は物理的な条件を持つ「世界」とは違つて、地図や

地球儀のようなものを描けないということです。「セカイ」は本質的に外延を確定できない、不定形なものです。しかし、それでもそれはけっして「無限」ではない。ネット上にアップロードされた情報は、どれほど膨大であっても、常に必ず「有限」です。「セカイ」に置かれたデータの総体から、自分が参照すべき特定のデータを拾い出してくれるのが検索機能です。だから、それは絶対に「有限」な筈だし、事実、検索エンジンには「〇〇の検索結果 約××件」と表示されています。なのに、そうした具体的な数がわかってしまうからこそ、不可避免的に「そんなに沢山の全部は無理」という気持ちが芽生えてきてしまう。たとえば「有限」だとしてもキリがない、だったらそれは「無限」と同じことじゃないか、というわけです。

すでに述べたように、ネット検索がなかった時代は、自力で手探りで情報を得るしかありませんから、ある事象にかんする有用な情報の総量は、まったくわかっていません。だから原理上はキリがないことになる筈ですが、そうはならず、それぞれの人間が持っている調査・探索の具体的な制約の中で、それなりにベストを尽くす、ということでもよかったわけです。明確なゴールが設定されていないので、できるだけやってみるしかなかったし、それでよかった。ところが、ネット時代になり、検索エンジンが登場して、何を調べるにも、まず最初に自分の能力とは別個の、客観的な検索結果が弾き出されるようになった。つまり、かりそめのものではあれ、ゴールが、最長到達点⁽⁴⁾が、外延のようなものが、つまり「すべて」のようなものが、ある具体的な数値を伴ったものとして、目に見えるようになった。

しかし、それはあくまでも検索結果一覧のリストに過ぎず、実際にそのリンクをひとつひとつ当たっていく作業は、やはり相当面倒だし、一定以上の、ともすれば相当な時間を要します。そして困ったことに、いきなり目の前に出現した「すべて」が、最初から絶対にしらみつぶしにすることなど不可能な広大さに見えることがある。宝探しをしていて、地図や手がかりが全然ないと出たとこ勝負になるしかありませんが、しかし地図が異常に広範囲⁽⁵⁾だったり、手がかりが多過ぎたり、宝の在処があまりにも無数に分散していたりしたら、それはそれで困ります。ネット検索の以前と以後の違いは、そのようなものだと言えるかもしれません。

更に言うと、たとえネット検索が素晴らしく進化しているとしても、もちろんネット上にある情報だけが情報ではありません。それは誰もがじつはわかっていて、にもかかわらず、というかそれだからこそ尚更⁽⁶⁾、ネットの情報でさえ「すべて」をチェックし切れないのに、その「外部」まであるなんて！ということになってしまふ。

こうしてインターネットという「セカイ」は、いささか⁽⁴⁾パラドキシカルな形で、一種の「無限」めいたものを生み出すことになる。第一に、「世界」の「データの表象」に存在する諸々の事柄⁽⁵⁾にかんして、可視化／顕在化された到達不能な外延を提示することによって。第二に、その外

延の更なる外部の可能性を示唆することによって。つまり、限りなく客観的な（少なくともそう見えるような）手段を用いて何事にかんする「すべて」を囲い込み、次にその「すべて」にかかわる「人間」の物理的・具体的・現実的な限界を露わにすることによって、いわば実感としての「無限」が出現する。

そもそも「すべて」なんて、勝手な自己申告や、単に自分でそう思い込むことによるのみ獲得することができるものです。それはあくまでも主観的なものであって、客観的な規準などどこにもありはしないし、今もない。ネットがなかった時代にも、もちろんある事象にかんする何もかもを知りたいという欲望は存在していました。しかし、そこで想定されている「何もかも」は、良くも悪くも茫漠⁽⁶⁾としていた。しかしネット検索によって「すべて」が数値化され、可視化されるようになった。その結果、そのような仮想的な「すべて」の途方も無い広さや遠さがリアルなものになってしまったのです。

それは言い換えるならば、⁽⁵⁾自分自身の「有限性」を思い知らされる、ということです。「セカイ」と「世界」の「無限」、その広大無辺と複雑怪奇⁽⁶⁾に比して、ひとりの人間の持っている可能性、※スペックは、あらゆる意味で、決定的に、絶対的に、絶望的に、致命的に、限られている。そのような認識が、どこかに働いているのではないかと思うのです。そしてそれは、たとえばインターネットというテクノロジー／メディアによって、広大無辺を測量・走査し、複雑怪奇⁽⁶⁾をシミュレーション要約できるようになってから、どういうわけか、かえって促進⁽⁷⁾されているように思われるのです。

（佐々木敦『未知との遭遇【完全版】』より）

※トレス……ここでは、重ねて説明すること。

※エッセンス……ここでは、重要な部分ということ。

※スペック……ここでは、能力のこと。

問一——線①③のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線(1)「インターネットがなかった」とありますが、この時代の調べものはどのようなものだったと筆者は述べていますか。二十一字以上三十字以内で答えなさい。

問三——線(2)「奇妙な展開」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 通常は検索結果の上から数件に目を通せば事足りるはずで、すべてをチェックすることは事実上できないはずなのに、自分が必要とする情報全部を手に入れられる喜びにとらわれ、時間も気にせず検索結果を見るようになってしまふということ。

イ 通常は検索エンジンが膨大な情報群から特定のキーワードにかかわるものすべてを拾ってくるはずなのに、それ以外のページにもその事象にかかわる情報が存在している気がして心配になり、いつまでも検索を終えられないようになってしまふということ。

ウ 通常は検索結果の最初の方のページをチェックするだけで必要な情報が十分に得られ検索を終わりにできるはずなのに、検索されたページの内容がおもしろくて興味をおさえきれず、ついついずっと検索を続けるようになってしまふということ。

エ 通常は検索結果の最初の方のページを確認するだけで十分で、すべてを確認するのは不可能で無意味であるはずなのに、それ以降のページも確認しないと不十分な気がして不安になり、図らずも延々と検索結果をチェックし続けるようになってしまふということ。

オ 通常は検索機能を上手に利用することである程度情報を絞り込むことができるはずなのに、圧倒されるほどに膨大な量のページが示されると冷静でいられなくなり、自力で検索結果のすべてを確認するようになってしまふということ。

問四——線(3)「『無限』と同じこと」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。四十一字以上五十字以内で答えなさい。

問五——線(4)「パラドキシカルな」とは「逆説(二見、矛盾しているようで実は真理の一面を言い表しているもの)的な」という意味ですが、「逆説」を含んだことわざとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三人寄れば文殊の知恵

イ 善は急げ

ウ かわいい子には旅をさせよ

エ 聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥

オ 犬が西向きゃ尾は東

問六——線(5)「自分自身の『有限性』を思い知らされる」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア インターネットを使うと、情報の「すべて」が提示され、その「セカイ」の「外部」にも情報が存在するなどという思いもよらなかったことに気づかされ、ひとりの個人の考えが及ぶ範囲の限界を感じずにはいられないということ。

イ インターネットを使うと、情報が大量に飛び交っているために、その「セカイ」の「外部」にある情報も含めて真偽を確かめる難しさを痛感させられ、ひとりの個人の能力の限界をまざまざと知らされるということ。

ウ インターネットを使うと、「無限」に思えるほどの情報群が立ち現れ、その「セカイ」の「外部」にある情報の所在まで明示できる優れた性能に、ひとりの個人としての無力さを意識せずにはいられないということ。

エ インターネットを使うと、「有限」か「無限」かわからないほどの量の情報が存在し、その「セカイ」の「外部」の情報までも逐一調べなければならぬ現実打ちのめされ、ひとりの個人としての敗北感を味わわれるということ。

オ インターネットを使うと、膨大な量の情報が検索されるとともに、その「セカイ」の「外部」にまでも情報が存在することが再認識され、ひとりの個人の力が及ぶ限界を実感せずにはいられないということ。

問七 次の会話は、本文を読んだ後に生徒たちの間で交わされたものです。これを読んで、後の(1)(2)の問いに答えなさい。

【生徒たちの会話】

生徒イ「自分たちもよく使う、インターネットの『困難』について書かれているね。『検索キーワード』とか『アップロード』とか、ネットの用語もたくさん出てくる。」

生徒ロ「わたしも気になった。あと、本文中にある波線部の『自分にとって真に有用な情報は、まだ見れていない』っていうところも。」

生徒ハ「あなたもそんなふうに心配になるから？」

生徒ロ「それもあるかも。あと『見れていない』っていう表現自体も気になったの。」

生徒イ「ああ。『見られていない』って表記するのが一般的なのかな。言葉の変化には、何か合理的な理由があるはずだね。何十年か先の未来では、それが普通の言い方になっているのかなあ。」

生徒ハ「『ら抜き言葉』って呼ばれるものだよ。ちょっとインターネットで調べてみようか。」

生徒イ「それで、また本文にあるように」

生徒ロ「わたしたち、困ってしまうかもしれないわね。」

(1) 右の会話で話題になっている「ら抜き言葉」に関する説明としてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「見られる」は一つの意味にしか解釈^{かいしゃく}されないが、「見れる」は何通りかの意味に解釈される。

イ 「見られる」は何通りかの意味に解釈されるが、「見れる」は一つの意味にしか解釈されない。

ウ 「見られる」と「見れる」は、どちらも何通りかの意味に解釈できる。

エ 「見られる」と「見れる」に共通するのは、「見ることができ」という意味である。

オ 「見られる」と「見れる」に共通するのは、「くらんになる」という意味である。

カ 「見られる」と「見れる」に共通するのは、「誰かに『見る』ことをされる」という意味である。

(2) に入るのに最もふさわしい表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 決定的に重要な情報が見つからなかったら
イ 難しい情報ばかりが提示されてしまったら
ウ おもしろい情報に夢中で見入ってしまったら
エ 役に立たない情報しか集められなかったら
オ 関係する情報が山ほど検索されてしまったら

(問題は以上です)

問五	
問六	
問七	(1)
	(2)

3

30

303

30

8